

廿五日  
五文

豆のこ少々

八文

やなぎ一本

百六拾文

酒壹升

九百六文

餅五斗八升春賃十五文がへ

合壹貫百三拾三文

餅春用

〔日本永代藏〕世界の借屋大將

此男生れ付て慳しほきにあらず、萬事の取まはし、人の鑑にもなりぬべきねがひ、かほどの身袋まで、としとる宿に餅搗す、開敷時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、是も利勘にて大佛の前へあつらへ、壹貫目に付何程と極めける、十二月廿八日の曙いそぎて荷ひつれ、藤屋見世にならべうけ取給へといふ、餅は搗たての好もしく春めきて見えける、旦那はきかぬ貌して十露盤置しに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷て、才覺らしき若ひ者、杜ちま仕の目りんと請取てかへしぬ、一時ばかり過て、今の餅請取たりといへば、はや渡して歸りぬ、此家に奉公する程にもなき者ぞ、温もりのさめぬを請取し事よと、又目を懸しに、思ひの外に減かへのたつ事手代我を折て、喰もせぬ餅に口をあきける、

雜載

〔令義解一職〕大膳職

大夫一人、掌略中看菓、略中主菓、餅二人、掌菓子造雜餅等、

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

内膳司預辨、供皇帝皇后御饌、主膳監、供皇太子饌、大膳職、設次侍從以上饌等類、置菓子雜餅

〔延喜式三十九〕造雜餅料甘醴一升 右日料御供

年料